第29号

あ～す・れっく
＝日資連界報＝

日本再生資源事業協同組合連合会
〒101-0061 千代田区五番町 12－6
TEL 03（3263）9101
発行人　倉林喜一郎
編集人　星本昭次
印刷　株式会社資源新報社

熊本で全国大会盛大に

日資連活動への一層の協力求め

日資連では去る六月二十二日(日)、熊本県熊本市の菊南温泉観光ホテルにおいて、第三十一回全国大会を開催した。

今年の大会参加者は全国より百七十名を超えるものだった。

開会宣言に続いて、今大会の大会実行委員長である日資連副会長、平林久一（西日本支部長、岡山県連）氏が開会の辞を延べ、同じく今大会の設営を担当した西原茂雄執行委員長（熊本市資協）が歓迎の言葉を述べた。

引き続き、倉林会長が挨拶に立った。

会長は挨拶の中で、昨年から今年度にかけての鉄、古紙価格の値戻しにふれ、日資連の取り組みと再生資源価格の適正化に向けての古紙、鉄くずの輸出継続と日資連活動への各県組合の協力を訴えた。

さらに引き続き、ご来賓の日資連特別顧問、大畠章宏衆議院議員、野田毅衆議院議員、木村仁参議院議員、渡辺道明九州経済産業局環境資源部長、潮谷義子熊本県知事、幸山政史熊本市長、江口隆一水俣市長、小野順一日本自動車リサイクル協会会長の各位よりご祝辞をいただいた。

このあと日資連の各委員長や支部長、担当役員よりの第三十一回通常総会の報告が行われた。

続いて行われた表彰式では、日資連相談役である西原利夫氏に感謝状が贈られた。また、前会長である福田啓治氏の叙勲報告とご挨拶が、ご子息である福田寛栄氏より述べられた。

第一部の最後は高らかに大会決議宣言が行われ、次期大会決定報告では次期大会設営担当が東日本支部、萩原右一日資連副会長に決定した。

なお、恒例により次期設営担当の萩原副会長が閉会の辞を述べて定刻、第一部が終了となった。

第二部では、ご当地熊本や熊本城などに縁の深い宮本武蔵にちなんで、「宮本武蔵と熊本」と題した講演が島田美術館館長の島田真裕氏により行われた。〝武蔵ブーム〟ということもあって非常に興味深い講演となった。

第三部懇親会では一同、熊本の特産や名物、郷土の出し物を十分に堪能しつつ、大会は成功裡に終了となった。

熊本大会を終えて

熊本市再生資源協同組合理事長　西原　茂雄

平成十五年六月二十六日、「第三十一回日資連全国大会in くまもと」につきましては、連合会会員又、全国各組合員の方々にはひとかたならぬご協力を頂き、誠に感謝しております。滞りなく盛大なうちに閉会できましたのも、皆様のご指導、ご協力あってのものと、熊本市再生資源協同組合、組合員一同深く感謝しております。

第三十一回全国大会の開催にあたりましては、各関係者の方のご指導のもと、打合せを繰り返し、落ち度のないようにと邁進してまいりました。まだまだ至らない点も多々あったと思いますが、全国各地の組合より多数おいで頂き、我々一同も大変喜んでおります。

本来ならば個別に御礼のために伺うのが筋ではございますが、この紙面を持って、今後の日本再生資源事業協同組合連合会の発展をお祈り申し上げ、お礼と感謝の挨拶と致します。

寄稿

全業界の課題として対策を

民間不在のリサイクルに危機感

クロネコヤマトが関東圏の一部地域で「文書回収リサイクル宅急便」をちらし広告で宣伝をした。そのシステムには、古紙の回収業者も問屋業者も介入していない。ヤマトが直接、製紙メーカーに運ぶもの。費用はリサイクルボックス一箱九百八十円、キロあたり約四十円でボックスの配布と回収、そして運送を請け負う。以前より異業種、特に大手運送業者の参入が危惧されていたが、まさに殴り込みの様をていしたもの。

このようにシステムの古紙回収業界に与える問題点はもう一つ。ファイルやバインダー、クリップ等の金属や綴じ紐など分別なしでもOKと言う点。

それらは、製紙メーカーの精選肯定で取り除き、発電のための熱源料（焼却）として利用することも含めて全量リサイクル、ゼロ・エミッションと謳っていること。分別の大切さを処理コストで包み隠し、なおかつ宣伝材料としている。

理想的な、あるいは究極のリサイクルシステムと言って我々回収業者をはずす動きが他にもある。

一つはパソコンリサイクル法。家電リサイクル法と同様、処理段階に再生資源業界の参入は困難である上に、回収は実質、郵政公社が行うということ。

また新たな個別リサイクル法に回収業者の今日までの努力が反映されなかった。

そして今一つ。

諏訪市において今年八月から始まった新聞古紙のみの回収システム。

市が業者（資源業者ではない）に回収を委託し、金属業者（古紙業者でせはない）にベールの処理を委託し、大王製紙がそれを市より買い取る。大王製紙は諏訪市の古紙も含めた（それだけでは不可能）新聞古紙一〇〇％の新聞用紙を地元の長野日報社に売却する。

これが「完全循環型」だそうだ。

実はこのシステムは数年前から隣の茅野市で取り入れられているもの。そのときも日資連として、厳重に抗議したが聞き入れられなかった経緯がある。

市内の古紙業者によると、市の担当からシステムの説明があったときに、「この様な偏った回収システムを取り入れなくとも、現在の回収方法（集団回収等）で十分に市内の古紙は回収できているのでは」と答えたために、外されてしまったとのこと。

さて、この様に回収業界はもとより、問屋業も参入できないリサイクルの新しいシステムが続々と誕生している。ここに説明した三つの例に関しては今後も「あーすれっく」でコスト負担の実態も含めて追跡調査し、お伝えするが、会員の皆さんも周囲を見回して我々の職権をおびやかしているものがないか調査していただきたい。

そして必要に応じて対抗策を講じなくてはならない。

日資連全体の問題として。僅かでも理不尽な所があるリサイクルシステムに対しては。

リサイクルの現状を紹介

倉林会長が千葉大学で講演

平成十五年七月七日、朝から空は雲におおわれていた。七夕は雨の日が多い。今年もあいにくの雨。午前八時三十分、千葉大学、立本教授の部屋で今日の講演について軽い打合せを行い、いざ教室へ。そこは三百人ほど入れそうな大きな教室であった。既に教室の半分近くは学生たちで埋まっている。

時間になると、立本教授が教壇に立ち「本日は日本再生資源事業協同組合連合会、会長倉林喜一郎氏にリサイクルの現場の話をしていただきます」と講師の紹介を行った。

紹介を受け、倉林会長は教壇に立つと、まず日資連の概要を説明し、続いて回収業が江戸時代に遡る事など歴史的な背景を話し始めた。話がベーゴマや釘が売れた時代の体験談になると学生は一層興味深そうに聞き入っていた。

さて、話は現在のリサイクル事情へと移る。

回収作業・回収コスト・市町村との協力・各種リサイクル法の概要・再生資源の海外輸出等について話した後、発生抑制と拡大生産者責任の重要性を説いた。

最後に「皆さんの住む千葉県は全国で資源化率がトップである」と述べ、「身近なリサイクル活動が地域や国だけでなく地球全体の環境を美しく保っていることを再認識し、これからも発生抑制とリサイクル意識を忘れずに世界をリードする人物になっていただきたい」と結んだ。

質疑応答では最近マスコミに取り上げられることが多い古紙の抜き取りについて質問があり、抜取りの問題について説明を行った。

九十分の講演が終わり外に出ると空には薄日がもれていた。

＝金属委員会報告＝

Aプレス問題で研修会

電炉の自動車R法への対応

七月某日、金属委員会は、月例会議の後、講師（大手電炉メーカー）を招いて目前に迫りつつある自動車リサイクル法に係る所謂「Aプレス問題」につき最終需要家である電炉メーカーの本音を聞く研修会を開催した。

同講師の明快な各種数字の説明は、ややもすると群盲象を評する感があった我々の予断を払拭し、その後の核心を突いた白熱の質疑応答と相俟って極めて有意義かつ啓発されたところ大であった。以下、略述したい。

一、図表添付

▽廃車リサイクルの変化

▽使用済み自動車のリサイクルフロー

▽全部再資源化認定にあたっての進め方イメージ

二、自動車リサイクル法の施行・実施日程等

■公布＝二〇〇二年七月十二日（六ヶ月以内、二〇〇三年一月十一日以内に施行）

■諸基準（政省令）許可申請＝二〇〇四年七月十一日以内

■電子マニフェスト、預託金管理システム完了＝二〇〇四年四月

■完全実施（発効）＝二年六ヶ月以内→二〇〇五年一月十一日以内

※（注）（委託）認定、リサイクル料金徴収、移動報告義務→二〇〇四年十二月頃から

三、Aプレス発生状況等

■使用済み自動車発生台数＝約五百二十万台（今後、廃車率は七％台で安定か）

■自動車重量一トン／台から廃車ガラ七百キロ／台発生。

廃車ガラの七五％金属スクラップ（五百二十五キロ／台発生）、二五％ASR（シュレッダー・ダスト、百七十五キロ／台初正）

※（注）過去のデータによると使用済み自動車の八五％がリサイクルされるので五百万台の内、約四百万台がリサイクルフローに乗る。（八十万台が輸出されている）

■したがってASR発生量→七十万トン／年、金属スクラップ発生→二百十万トン／年となる。

■鉄鋼メーカーによるAプレス使用量

（財）金属系材料研究開発センターによると（二〇〇三年一月のアンケート調査）三十～三十三万トン／年。ただし、五年位の間、六十万トン（百二十万台）／年と倍増予想。

※（注）当初、五十万台位が、Aプレス（ソフトプレスを含む）輸出、国内使用（電炉等）、ギロチン転換するものと予想したが、現在は二百二十万台／年と大幅に見直しをしている。

四、電炉メーカーのAプレスに対する考え方

イ）銅をはじめとする非鉄金属や不純物が多く、配合上注意する必要があるが、H2比極めて低価格という魅力がある。

ロ）したがって製品品質に問題を生じない最大許容範囲までAプレス配合を増やしたい。

このようにAプレスに前向きなところが大半であるが、その一方でダイオキシンや臭気、低嵩比重による装入回数増、製品品質低下を危惧する声も少数ではあるが存在する。

※（注）Aプレスを使用している電炉メーカーの配合率は平均三～五％で最大でも一〇％位である。特に、銅を含むハーネス（被覆込み）の除去を解体時、入念に行えばAプレス使用量はさらに増加するものと思われる。

私見であるが製品品質上、特殊鋼メーカーや平鋼・H形鋼メーカーではAプレス使用は考えにくい。即ち、Aプレスの主要需要家は、棒（丸棒）・形（形鋼）メーカーとなる。

◎Aプレス使用による製造コスト削減計算式（メーカー炉前価格）

（前提）H2＝一万一千円／トン、Aプレス＝一千円／トン　の時、H2の代わりにAプレスを一〇％配合すると、（一万一千円－一千円）×一〇％＝一千円／トンコスト安となる。

その一方、Aプレスが低品質のために生ずるマイナス要素、即ち、鉄含有量がH2比低いので歩留まりが悪い、夾雑分が多いことによる精錬時間増（電力コスト）や精錬費増（石灰石使用増等）、Aプレスが嵩比重が悪いことから生ずる装入回数増→製鋼時間増によるコストアップ等々もある。しかしながら、此等のマイナスは、百～百五十円／トン程度でメリットの方が遥かに大きい。

※（注）余談であるが、大手高炉メーカーの内、既存の転炉を活用する冷鉄源溶解法が新日鉄中心に実用化（広畑）しつつあるが、廃タイヤもエネルギー代替の一部として使用する等、注目されており、Aプレスも精錬研究課題となるかも知れない。

八木氏（JFE）講師に勉強会

高炉環境ビジネスへの取組み

「治に居て乱を忘れず」「転ばぬ先の杖」「敵を知り己を知れば百戦危うからず」等の諺がある。

我々にとって非常に遠く巨大であり、何か広漠とした蜃気楼のようなイメージしかなかった高炉業界は、時折見せる市中鉄屑市場へのアプローチとは別にここ数年急速かつ本格的に所謂「環境ビジネス」に参入する姿勢を見せるに及んで俄かに身近な存在となってきた。

長期的価格低迷もあって我々資源業界は、第一象限（正・有償の世界）だけでは、生計が立たず、止むなく第四象限（負・逆有償）の世界にも足を踏み入れた両棲的性格を帯びつつあり、高炉メーカーのこのような動きは注目すべきであるとして金属委員会で種々議論を重ねた。その結果、高炉メーカーが環境ビジネスを経営上どのような位置づけをし、現状と将来展望につきどのようなコンセプトで臨むのか直接聴取の上、勉強する事となり、鉄鋼業界出身の事務局（馬場）が実現に向け、その衝に当たり二月二十日の研修会で結実する事となった。

当日は、八木竜一講師（JFEホールディングス・環境ソリューションセンター）をはじめ、日資連側は、倉林会長、西原副会長、遠藤金属委員長他、主催者は、青山サンキ二名等、出席者は約三十名に上り、午後三時から午後五時まで、近年稀に見る充実した勉強会となり、盛会裡に終わった。

なお、当日は、ビデオでの説明（廃プラの高炉吹き込み）の他、厖大な資料の下、八木講師の詳細な説明があった事を付記したい。

［研修会の要点］

一、JFEグループ今後の展開（略）

二、JFE環境経営の二〇〇〇年以降の取り組み（NKK）（略）

三、環境ソリューションの展開分野と事業の推進

製鉄メーカーの製鉄とエンジニアリングの強みを生かし、提案型ビジネスを行う事とし、リサイクルソリューション、エコエネルギーソリューション、環境マネジメントソリューションの事業区分となる。

この内、本日は、リサイクルソリューション即ち、プラスチックリサイクル、家電リサイクル、蛍光灯・乾電池リサイクル、廃酸・廃アルカリ処理、RDF等に焦点を絞って説明する。

（イ）使用済みプラスチックの高炉原料化について

NKKでは、一九九六年から取り組み、当初は入手難で悩んだが、近年に至り急速に原料化量が伸長し、今やコークス代替品として無視できぬ存在となった。　なお、使用済みプラスチックは、コンクリート型枠という用途もある。

（ロ）使用済み家電リサイクル

手選別による徹底した前分別が特色で、これなくしては本件は成立しない。

（ハ）蛍光灯リサイクル

蛍光灯の収集から再資源化、適正処理まで一貫対応を行う。具体的には、ドイツPPF社・ALD社より最先端の乾式処理プラントを導入し蛍光灯を水銀・ガラス・金属に分離する完全リサイクルシステムで直管オールサイズに対応できる。

（ニ）乾電池リサイクル

乾電池を回収から資源リサイクルまで一貫対応する。具体的には、乾電池処理設備で鉄・非鉄に分離し、鉄は製鉄原料としてリサイクル、非鉄は、非鉄精錬所にて亜鉛、鉄を資源として回収する。その他は、溶融スラグ化し、セメント原料等にリサイクルする。

最後に未だ実用に至ってはいないが、実証研究を行っている項目について略述する。

A、塩化ビニルのリサイクル

ロータリーキルンにて塩ビを大量処理し脱塩素プラスチックは前述の高炉原料に、回収塩酸は、製鉄所の酸洗用として利用するというものである。

B、シュレッダーダストリサイクル技術

サーモバス法により金属とプラスチックを高速分離する。分離プラスチックは、高炉原料へ、金属類は鉄・銅・アルミに分離しマテリアルリサイクル。

※（注）その他建設資材リサイクル技術として建設廃木材の高炉原料化システムも実証研究に対象としており、進捗しつつある。

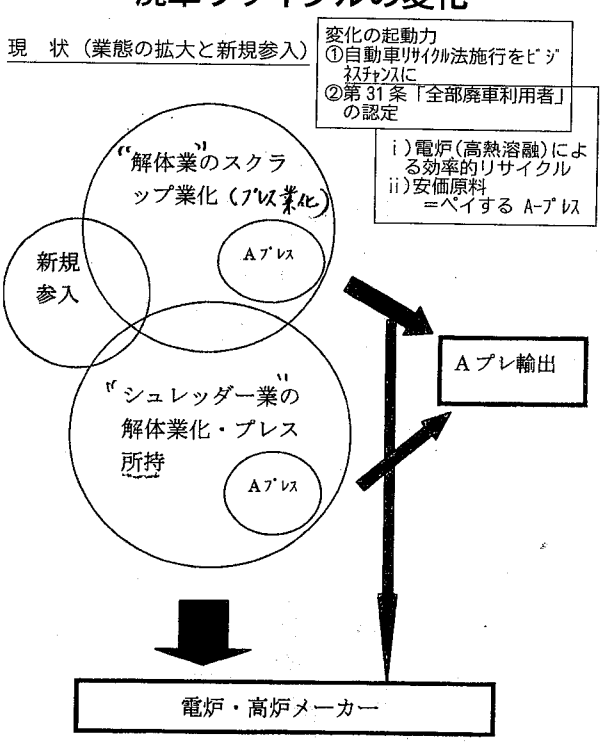
［結び］

「鉄は国家なり」として鷹揚に構えていた時代は過去のものとなり、鉄鋼メーカーも大手高炉と雖も生き残りに必死である。

犬猿の仲にあったNKKと川鉄が合併する等、昔は考えられない事であった。それはともあれ、JFEが製鉄部門をはじめ、業態により分社化すると利益の大半を生み出す製鉄以外の新会社は非常に厳しい採算を強いられているはずである。ソフトだけで何百人も食えるほど、甘い状況ではないからだ。そうなると形振り構わずあらゆる関連業界に雪崩込むことも考えられる。

一廃物であっても行政と異常接近するケースもありうるかも知れない。産廃であれば、大手排出元と強力なタッグマッチチームを作る動きを見せるかも知れない。

これこそ私が冒頭に掲げた各種格言の真意である。要は高炉メーカーを利用した方が賢いが、そのためには、高炉メーカーの勉強をする必要があるということに尽きる。



小山市（栃木）で条例化決まる
持ち去り対策に行政対応進む

「資源ごみ盗難防止へ・九月議会に条例改正案―県内初、罰則無し」

八月十九日付けの地方紙一面の見出しである。

条例改正を検討しているのは栃木県小山市。

ごみ収集所に出された資源ごみが無断で持ち去られるケースが後を絶たないため、小山市は防止策の一環として、持ち去りを禁止する条例改正案を九月定例議会に提出する。大久保小山市長が定例会見で明らかにした。

同種の条例は今年四月から杉並区で施行しているが、県内では初めて。

今回改正するのは「市廃棄物の処理及び清掃に関する条例」。改正案では、収集所に出された資源ごみの所有権が市にあることを明記し、市長が指定する者以外の収集・運搬を禁止する内容。制定されれば各ステーションに、所有権が市にあることを明記する看板を設置する。条例改正は持ち去り防止のほか、分別に対する市民の意識を低下させないようにするねらいがあるとしている。

小山市内には資源ごみステーションが約千四百ヵ所あるが、近年、業者がトラックでアルミ缶、新聞紙、雑誌などを根こそぎ持ち去るのが目立ち、市民からの苦情が数多く寄せられていたため、市は持ち去り禁止の看板を設置したが、効果がほとんどなかったという。

このため弁護士や警察などと相談し、今の法制度では取り締まるのが難しいと判断し、条例改正となった。

条例案には罰則規定はないが、悪質なものは窃盗として警察に通報するとしている。

栃木県内では、持ち去り行為による被害が拡大し続け、前回のアースレックでも紹介したが、なんらかの対策を考えている行政が大半であったことから、これを契機に条例化の動きが加速すると思われる。しかし、どこまでの拘束力があるかは懸念されるところである。

青年部活動が活発化
定例部長会開催など連絡を密に

日資連青年部では、毎月第一火曜日に関資連青年部と合同で定例部長会を行なっております。

日資連本部（東京）で開催されるため、参加し難い地域の単協部長へは、決議事項など、その場で電話連絡し、即決できる環境を目指しております。

また、後日議事録を送付し、情報の共有化を図っております。

現在の活動としては日資連のホームページ上に、組合員専用ページを設け、情報伝達手段としての新しい可能性を模索しながら、リニューアルを試みています。

また、今年十月から首都圏でのディーゼル車排ガス規制が実施されますが、規制対象地域外への車両有効活用のための、情報提供事業も考えております。

まだまだ、車両譲渡時の責任問題等、考えなければならない事項があり、部長会で継続審議とされていますが、組合員相互間で車両を有効活用できれば、メリットは大きいと考えられます。

このシステムが実施の際は、是非ご活用いただきたいと思います。

青年部は、試行錯誤を繰り返し、ひとつのものを作り上げて行く過程で、横のつながりを強化できればと思っております。

是非、この輪を広げていき、全国組織としての日資連を盛り上げて行きたいと思いますので全国からの青年部のご参加をお待ちしております。（松本）

組織の拡充に努力

関資連青年部長　川島　泰次

昨年の九月に関資連青年部長という大役を仰せつかってから早くも一年が過ぎ去ろうとしております。この一年間は初めての大役に右往左往することが多く、関資連青年部長として何をなすべきか、常に頭から離れることがありませんでした。

手探り状態の中、松本日資連青年部長と青年部運営について相談をしたところ、定例会を開催して情報交換を密にすることが必要であると意見が一致し、各地区の部長の賛同も得られたので、毎月部長会を開催する運びとなりました。

関東地区とはいえ毎月関資連事務所まで足を運ぶのは大変ですが、部長会を開催することでお互いよく理解できるようになり、会議の内容も深いものとなりました。特にこの一年間で重点的に取り組んできたことは、青年部名簿の作成と青年部未加入地区への働きかけの二点です。青年部名簿は九月六日の青年部総会にて配布する予定です。

この名簿には住所・氏名・連絡先のほかに取り扱い品目を掲載しております。これらよって遠隔地の仕事を青年部間で融通しあうことが可能となります。

次に青年部未組織地区への働きかけとしましては関資連理事会、拡大理事会等に出席した折に理事長へ青年部組織化のお願いをしてまいりました。念願がかなって今回の青年部総会は茨城県において開催することとなりました。茨城県再生資源事業協同組合の関本理事長には大変ご無理を申し上げ、設営にお骨折りを頂き、茨城の若手との橋渡しをしていただき誠に感謝しております。この紙面をお借りいたしまして重ねてお礼申し上げます。

また、来年には東北六県再生資源組合連合会青年部との連絡会を検討しております。

今後、ますます横のつながりを強化して歴代の青年部長と青年部員の皆様が作り上げてきた青年部を一歩でも前進させて次の青年部長へバトンタッチできるよう、精一杯活動したいと思っておりますので、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

日資連最近の行事予定

9月　2日	日資連・関資連青年部部長会	
9月　6日	関資連青年部　総会	
9月13日	関資連　第５０回通常総会	
9月17日	古紙循環プロジェクト	
9月20日	日資連　システムプランニング委員会	
9月27日	日資連　古紙委員会	
	講演会　経済産業省製造産業局紙業生活文化用品課	環境技術担当補佐　大根田　享氏
	日資連　理事会	
10月18日	日資連　システムプランニング委員会	
	関資連　理事会	
11月15日	日資連　理事会	
	日資連　システムプランニング委員会	
12月20日	日資連　システムプランニング委員会	

平成15年7月15日調査

日資連モニター集計表

基準は問屋持込販売価格（円／kg）

No.	組合名	H２（特級）	発生	鉄千地（二級）	発生	スチール缶プレス	発生	スチール缶バラ	発生	アルミ缶プレス	発生	アルミ缶バラ	発生	光特号（銅）	発生	新聞	発生	雑誌	発生	段ボール	発生	込ボロ	発生
1	札幌	高値 6.0 安値		高値 1.0 安値		高値 4.0 安値		高値 0.0 安値		高値 80.0 安値		高値 70.0 安値		高値 安値		高値 9.0 安値 7.0		高値 4.0 安値 2.0		高値 4.0 安値 2.0		高値 安値	
2	栃木	高値 9.0 安値 8.0	不変	高値 0.0 安値 ▲3.0	不変	高値 7.5 安値 6.5	不変	高値 0.0 安値 ▲3.0	不変	高値 105.0 安値 100.0	増	高値 80.0 安値 75.0	増	高値 195.0 安値 185.0	減	高値 9.0 安値 7.5	不変	高値 5.0 安値 4.0	不変	高値 7.5 安値 5.5	不変	高値 安値	
3	群馬	高値 9.0 安値 7.5		高値 2.0 安値 0.5		高値 6.0 安値 5.0		高値 1.0 安値 0.0		高値 95.0 安値 90.0		高値 85.0 安値 80.0		高値 185.0 安値		高値 6.5 安値 5.5		高値 2.5 安値 2.0		高値 5.5 安値 4.0		高値 安値	
4	埼玉	高値 9.0 安値 8.0	減	高値 1.0 安値 0.0	減	高値 6.0 安値 5.0	減	高値 0.0 安値 0.0	減	高値 95.0 安値 90.0	減	高値 85.0 安値 80.0	減	高値 197.0 安値 190.0	減	高値 安値 5.0	不変	高値 安値 3.0	不変	高値 安値 5.0	減	高値 安値 0.0	不変
5	千葉	高値 8.0 安値 7.0	減	高値 6.0 安値 0.0	減	高値 7.0 安値 6.0	減	高値 0.0 安値 0.0	減	高値 110.0 安値 90.0	減	高値 60.0 安値 30.0	減	高値 180.0 安値 170.0	減	高値 8.0 安値 6.0	減	高値 3.0 安値 2.0	減	高値 6.0 安値 5.0	減	高値 1.0 安値 0.0	減
6	東京	高値 7.0 安値 6.0		高値 ▲2.0 安値 ▲3.0		高値 3.0 安値 2.0		高値 90.0 安値 40.0		高値 105.0 安値 90.0		高値 70.0 安値 60.0		高値 180.0 安値 170.0		高値 7.0 安値 6.0	減	高値 4.0 安値 3.0	減	高値 5.0 安値 3.0		高値 安値	
7	神奈川	高値 10.0 安値 7.0	不変	高値 0.0 安値 ▲5.0	不変	高値 5.5 安値 3.5	増	高値 2.0 安値 ▲3.0	増	高値 107.0 安値 90.0	増	高値 90.0 安値 70.0	増	高値 200.0 安値 160.0	不変	高値 8.0 安値 5.0	不変	高値 3.5 安値 2.5	不変	高値 5.0 安値 4.0	不変	高値 2.0 安値 0.0	不変
8	富山	高値 安値 7.7		高値 安値 2.5		高値 安値 4.0		高値 安値 0.0		高値 安値 55.0		高値 安値 20.0		高値 安値 175.0		高値 安値 4.5		高値 安値 2.0		高値 安値 4.5		高値 安値	
9	福井	高値 8.0 安値 6.5	減	高値 3.0 安値 0.0	減	高値 7.0 安値 5.5	不変	高値 3.0 安値 0.0	不変	高値 90.0 安値 70.0	不変	高値 70.0 安値 30.0	不変	高値 170.0 安値 150.0	減	高値 6.0 安値 4.0	不変	高値 2.0 安値 1.0	不変	高値 4.0 安値 3.0	減	高値 安値	
10	岐阜	高値 安値		高値 安値		高値 8.4 安値	不変	高値 安値		高値 100.0 安値	不変	高値 安値		高値 安値		高値 4.0 安値	不変	高値 2.5 安値	不変	高値 5.0 安値	不変	高値 0.0 安値	減
11	静岡	高値 7.0 安値 5.5	不変	高値 2.0 安値 ▲2.0	不変	高値 安値		高値 1.0 安値 ▲2.0	増	高値 90.0 安値 80.0	増	高値 70.0 安値 60.0	増	高値 185.0 安値 175.0	不変	高値 4.0 安値 3.0	不変	高値 3.0 安値 2.0	不変	高値 5.0 安値 3.0	減	高値 2.0 安値 0.0	減
12	大阪	高値 12.0 安値 11.0	減	高値 6.0 安値 4.0	減	高値 6.0 安値 4.0	増	高値 0.0 安値 0.0	増	高値 110.0 安値 105.0	増	高値 95.0 安値 85.0	増	高値 197.0 安値 195.0	減	高値 6.0 安値 0.0	増	高値 3.0 安値 0.0	減	高値 5.0 安値 0.0	減	高値 3.0 安値 0.0	不変
13	奈良	高値 9.0 安値 6.0		高値 3.0 安値 ▲5.0		高値 7.0 安値 4.0		高値 2.0 安値 0.0		高値 90.0 安値 60.0		高値 70.0 安値 40.0		高値 160.0 安値 140.0		高値 5.0 安値 4.0		高値 2.0 安値 1.0		高値 4.0 安値 2.0		高値 2.0 安値 0.0	
14	鳥取	高値 8.9 安値		高値 安値		高値 安値		高値 ▲2.0 安値		高値 安値		高値 45.0 安値		高値 185.0 安値		高値 3.5 安値		高値 0.0 安値		高値 2.0 安値		高値 安値	
15	岡山	高値 13.0 安値 12.0	減	高値 6.0 安値 5.5	減	高値 10.0 安値 9.0	増	高値 2.0 安値 0.0	増	高値 100.0 安値 95.0	増	高値 70.0 安値 60.0	増	高値 175.0 安値 165.0	減	高値 6.0 安値 4.0	不変	高値 4.0 安値 2.0	不変	高値 4.0 安値 2.0	減	高値 ▲5.0 安値 ▲7.0	減
16	徳島	高値 6.0 安値 5.0	減	高値 2.0 安値 1.0	不変	高値 2.0 安値 1.0	不変	高値 1.0 安値 ▲4.0	不変	高値 90.0 安値 60.0	不変	高値 70.0 安値 40.0	不変	高値 170.0 安値 140.0	不変	高値 3.0 安値	減	高値 0.0 安値	不変	高値 2.0 安値	不変	高値 ▲5.0 安値 ▲10.0	不変
17	熊本	高値 8.0 安値 6.5	不変	高値 ▲7.0 安値 ▲7.0	不変	高値 8.2 安値 6.8	不変	高値 ▲7.0 安値 ▲7.0	不変	高値 80.0 安値	不変	高値 40.0 安値	不変	高値 160.0 安値 155.0	不変	高値 7.0 安値	減	高値 3.0 安値	減	高値 5.0 安値	減	高値 安値	
平均値		8.7 ～ 7.4		1.6 ～ ▲0.8		6.3 ～ 4.8		6.2 ～ 1.5		96.5 ～ 82.7		71.3 ～ 56.2		181.4 ～ 166.9		6.4 ～ 4.6		3.0 ～ 1.9		4.8 ～ 3.2		0.0 ～ ▲2.1	

パソコンリサイクル

課題残し10月スタートへ
不法投棄の懸念家電以上とも

今年十月から使用済みの家庭系パソコンの回収システムがスタートする。

現行の資源有効利用促進法では、製造事業者が自社製品について回収・再資源化すべき製品を「指定資源化物」として指定し、併せて事業者が取り組むべきことがらを判断基準として示している。この制度に基づいて指定資源化製品のひとつであるパソコンについても、事業系から発生するものについてはすでに平成十三年度からメーカーによる自社回収と再資源化が始まっている。

一方、家庭から発生する個人使用のパソコンについては、自治体による粗大ごみ回収や販売店引き取りが定着していることや、産業廃棄物の処理などで排出時経費負担が根づいている事業系発生とは異なり、有価処理というシステムが根づきにくいということから、さきにスタートした回収システムにはなじまないとして別扱いにされたという経緯がある。

ただしこの間、経済性や排出者の利便性も勘案しつつ家庭系パソコンの回収・再資源化システムについても検討されており、今回これら周辺環境が整ったとして新たなシステムがスタートすることになったもの。

テレビ、エアコン、冷蔵庫、洗濯機の家電四品目については家電リサイクル法の施行によってメーカーによる回収・再商品化のシステムが構築されており、家庭系パソコンについても発生源がこれら四品目と同じであることや排出時の費用負担やメーカー回収システムなど家電R法にならう点が多いことなどから、この法律の対象品目の一つに加えるという案も出されていた。反面、家電と異なる点として、購入時の持ち帰りが多く配送時の廃棄品引き取りが少ない点や、流通経路が多岐にわたること、使用品の耐用年数を経ずに新品を購入する場合に新品購入と保有品の廃棄が同時期とは限らないことなどがあげられる。また、パソコンという製品特性から複数メーカーの商品を組み合わせて使用する場合も多いため、現行の家電リサイクル法のシステムにあてはめることは困難であるという指摘もあった。

家電リサイクル法では指定引き取り場所への持ち込みや購入時の販売店引き取りが排出者からの直接の回収窓口となったが、新たなシステムでは回収の共通スキームとして郵政公社の「ゆうぱっく」が採用された。

具体的には、消費者がパソコンを排出する際、製品の製造・販売メーカーに回収を申し込み、回収・再資源化に必要な料金をメーカー指定の方法で支払ったのち、最寄りの郵便局に持ち込むか指定郵便局に集荷を依頼することになる。

本年十月の制度スタート以降に販売される製品についてはリサイクル諸コストを製品購入時に負担することとなり、それら製品については費用支払い済みである旨のリサイクルマークが付与されるため、排出時の費用負担は不要となる。従って排出時費用負担が必要なパソコンは十月以前の購入商品もしくは既販製品のみとなる。

今回スタートするシステムには国内メーカーの大半が参加を表明している。制度実施に先立って各社が「独自に設定する」こととなっていたリサイクル費用がさきごろ相次いで公表されたが、先行して公表された大手メーカー数者の料金はデスクトップ本体、ディスプレイ各三千円、ノート型三千円、CRT一体型各四千円、CRTディスプレイ、CRT法の場合にも各社横並びという料金設定や、料金が実情に合うものであるかなど議論の的となったが、結果的にパソコンについてもこの料金設定に後発の各社も習うことになる。

システムに参加しないメーカー品への対応や倒産メーカー品、個人輸入品、自作品など回収・再資源化義務者がいないパソコンの扱いが問題となったが、東京都はさきごろ、システムの構築から運営までを行う（社）電子情報技術産業協会（JEITA）と共同でこれら対象外商品についてもほぼ同様の仕組みで再資源化ルートに乗せていくための独自システムを構築しており、各地で同じような対応がなされることになるもよう。

家電リサイクル法の場合、制度スタート直前の駆け込み廃棄や、直後から表面化した不法投棄の問題があったが、家庭内で使用されないまま退蔵されているパソコンが家電四品目とは比較にならないほど多いものと予想されることや、四品目と比べても小型・軽量と不法投棄につながる要因が大きい点など多くの懸念材料が指摘されている。

リサイクル

ハンドブックを作成
古紙ネットが普及啓発活動で

このほど、古紙問題市民行動ネットワークでは、ハンドブックとして「紙と古紙～環境の視点から考える～」を発刊した。

古紙の現状とリサイクルの大切さを訴えたビデオ「まわれ古紙リサイクル」の制作に続く、このハンドブックの発刊と、古紙ネットの意欲的な活動には敬意を表すると共に感謝したい。

さて、「紙と古紙～環境の視点から考える～」の内容だが、紙とはどういうものかの基礎編、紙の原料である木材伐採からの生産の流れを追う紙編、不要になった紙を集めて再生に回す古紙編、資料編と四つに分けて作られている。また、紙編、古紙編は必要に応じて読み進めることができる。

子供でも理解できるようにと丁寧な説明がなされ、随所に可愛いイラストが差し込まれている。

我々、回収業者の視点ではつい見逃しがちな問題や、むしろ回収業者こそ知っておかなければならないデータなどもふんだんに盛り込まれている。集団回収団体の役員さんや子供達の副読本として広く普及させたい本である（普及後に市民から質問されても良いように、真っ先に我々は是非とも読んでおきたい）。

販売価格は一部百円（送料別）、問い合わせはまず日資連本部まで。

なお、古紙ネットでは十月中に東京都内でシンポジウムを計画している。現時点ではテーマも未定であるが、今回も古紙を中心にリサイクルの問題点について活発な討論が行われることだろう。

詳しいシンポの案内は詳細が決まり次第、各県単協を通じてお配りする事にする。（片岡）

【編集後記】

十月よりいよいよパソコンリサイクル法の運用開始です。私の県では組合として県行政より説明を受けましたが、十月以降シール付きのパソコンは扱えないとのことでした。再資源化業界からまた一つ扱い品目が減ってしまうことに大きな不安を感じます。

儲けの多い仕事には異業種業界がどんどん参入しています。

業界が早急に一つとなって対応しなければいけない時期なのではないでしょうか。

最後に、日資連大会を設営して頂いた熊本の皆さんお世話になりました。

あの桜刺し美味しかったなー。

神奈川県資源回収商業協同組合
理事長　萩原右一
〒220-0023 神奈川県横浜市西区平沼 1-40-17
モンテベルデ横浜３１１号室
TEL 045(313)6100・FAX 045(313)6161

東京都資源回収事業協同組合
理事長　紺野武郎
〒220-0023 東京都千代田区三崎町 2-21-1
TEL 03(3263)36760・FAX 03(3263)3679

千葉県資源リサイクル事業協同組合連合会
会長　大塚勝彦
〒260-0015 千葉県千葉市中央区富士見 2-22-6
富士ビル５階Ａ号室
TEL 043(227)8273・FAX 043(227)2033

奈良県資源回収事業協同組合
理事長　吉田勝重
〒635-0021 奈良県大和高田市池尻 82-1
TEL 0745(52)5824・FAX 0745(53)3533

大阪府再生資源事業協同組合
理事長　入江金男
〒567-0865 大阪府茨木市横江 2-9-45
TEL 0726(30)6730・FAX 0726(30)6731

岡山再生資源事業協同組合
理事長　佐藤章夫
〒700-0026 岡山県岡山市豊成 3-14-20
TEL 086(902)0011・FAX 086(902)0140

栃木県リサイクル協同組合連合会
会長　阿久津守光
〒322-0035 栃木県鹿沼市朝日町 1952-2
TEL 0289(62)2239・FAX 0289(62)2246

広告求む！

埼玉県再生資源事業協同組合
理事長　細田益弘
〒338-0826 埼玉県さいたま市桜区大久保領家 343-7
TEL 048(852)9048・FAX 048(852)9075